

第1節 下北方5号地下式横穴墓の構造

地下式横穴墓の構造 下北方5号地下式横穴墓は、昭和50(1975)年7月に緊急調査が実施された。これまでに確認されている地下式横穴墓で最大級の規模をもつ地下式横穴墓である。天井部の崩落や壁面の剥落、竪坑上部の一部削平は認められるもののおおむねその原形を保った状態であった。

竪坑は一部未掘であるものの、平面形が前壁から後壁に向かって幅を減じる隅丸台形状で、断面形は横方向では逆台形状である。縦方向の断面形も同様とみられるものの不明確である。底面はおおむね平坦である。現状で判明している竪坑の規模は、検出面での長さが3.50m以上、幅が羨門側で約3.40m、検出面からの深さは2.30mである。

羨門は不整形な台形で、入り口部分の高さが1.81m、幅が1.15mである。続く羨道は長さ約1.20m、幅1.35mで玄室近くの左右側壁には長方形の突出部が掘削されている。両者は羨道床面において浅い溝でつながっており、一連のものと判断できる。その形態と位置から閉塞材を設置するための造作と考えられる。

玄室は妻入り長方形で羨道側の幅がわずかに広い。天井部は家形天井である。奥行きは、もっとも長い右側壁側で5.55mである。幅は、羨道側で2.10m、奥壁側で1.96m、最大となるのは奥壁から玄門側に4.0m付近で、その幅は2.36mである。天井の高さは最大で1.75mであるが、天井部が崩落している玄室中央付近はこれよりわずかに高いものとみられる。玄室の床面にはほぼ全面に小礫が敷き詰められており、中央部には長軸が玄室長軸と平行する屍床が大振りの石材によって設けられている。屍床の両小口には、大振りの石材を積み上げた高さ約0.5mの衝立状石積みがある。屍床の規模は内法で長さ2.87m、幅が奥壁側で0.45cm、羨道側で0.52mである。屍床の床面は一部を除いてほぼ平坦である。また、壁面には一面に赤色顔料が塗布されていた。

また、今回の報告で、屍床内には鏝を用いた木棺が存在していた可能性が高いことが示された(本書第V章第3節)。その具体的な規模や構造は明確でないものの、基本的に棺を用いないとされる宮崎平野部の地下式横穴墓に木棺の使用が見出されたことは重要な新知見といえよう。

閉塞は羨道部玄室側左右側壁に掘削された長方形突出部に板状の閉塞材をはめ込み、その前後を粘土および石材で押さえることでなされたと考えられる。閉塞材を設置する位置が玄室側である点の特徴である。竪坑は掘削廃土で埋め戻されたと考えられるが、土層の詳細は不明である。

墳丘と地下式横穴墓 下北方5号地下式横穴墓は、推定直径約25mの円墳である下北方9号墳の南西裾部にあり、玄室がその墳丘下に構築されている。墳丘との位置関係から竪坑は9号墳周溝内に位置すると考えられる。隣接する下北方8号墳では周溝内に構築された地下式横穴墓の竪坑部分の周溝が陸橋状に掘り残されていたとの記録があるが、下北方9号墳周溝と下北方5号地下式横穴墓竪坑との関係は不明である。

数次にわたる調査の結果、下北方9号墳の墳丘盛土には9号墳周溝底面がおよばず下北方5号地下式横穴墓では掘削のおよんでいる深度の地山層が含まれていることが明らかになり、下北方5号地下式横穴墓の掘削と下北方9号墳の築造は、同時である可能性が高いことが判明した。また、下北方5号地下式横穴墓の主軸は墳丘中心部に向かっている。こうした状況から、下北方5号地下式横穴墓が下北方9号墳の主たる埋葬施設であるとするのが現段階ではもっとも蓋然性が高いといえる。

墳丘を有する地下式横穴墓には、西都市西都原4号地下式横穴墓のように墳丘上にも埋葬施設が存在する事例があり、地下式横穴墓と墳頂部埋葬施設との関係性が注目されている。下北方5号地下式横穴墓においてもこのことを念頭において墳丘部分の調査を実施した。結果的に、墳頂部に埋葬施設の存在は確認されな

かった。しかし、墳頂部は削平を受けている可能性が高いことから、本来的な墳頂部埋葬施設の有無は明確にすることができなかった。ただし、昭和57(1982)年、平成28(2016)年の発掘調査の際には、いずれの土層中からも副葬品の出土など埋葬施設の存在を示唆するような所見は得られていない。下北方5号地下式横穴墓と同じく下北方9号墳丘下に構築されている下北方4号地下式横穴墓は、出土遺物の年代観から下北方5号地下式横穴墓に後出するもので、副次的に下北方9号墳周溝内に構築されたものと判断できる。

第2節 下北方5号地下式横穴墓出土遺物の特徴

出土遺物の組成 下北方5号地下式横穴墓からは多種多量の副葬品が出土している。その内訳は第IV章第1節に示した通り(第12表、p.70)で、このうち土器片を除くすべてが下北方5号地下式横穴墓にともなうものである。その中心となるのが、武具、武器であり、これに馬具一式、多様な農工具などの鉄製品、2面の青銅鏡、垂飾付耳飾、豊富な玉類、半円形ガラス製品などが加わる。この内容は、列島各地に存在する同時期の有力古墳と比較しても遜色がない。地下式横穴墓の中では傑出した存在であり、とくに農工具や装身具類が多い組成であることが特徴である。

下北方5号地下式横穴墓にともなうこれらの遺物は、屍床や副葬品の配置、後述する遺物の年代観から、一回の埋葬にともなう一括の資料群であると判断できる。副葬品はすべて玄室内からの出土であり、大まかに屍床内、屍床外にわけられる。出土状況の詳細は本書第IV章第1節に示した通りである。

出土遺物の特徴 武具には小札鋌留眉庇付冑、三角板鋌留短甲、頸甲、小札肩甲からなるセットと横矧板鋌留短甲単体の計2セットがある。その中に冑、短甲、頸甲、肩甲からなる武具一式が含まれた複数セットが副葬されている点に注目できる。また、鉄製小札と革製部材を組み合わせた特殊な構造をもつ肩甲や、類例のない蝶番構造を有する三角板鋌留短甲の存在も特徴として挙げられる。三角板鋌留短甲と横矧板鋌留短甲は、いずれも鋌留短甲では古相に位置付けられる資料である。

武器には、刀剣類、鉄鉾、鉄鏃がある。刀剣類には銀装大刀1、鉄刀1、鉄剣6ないし9(実数は7と推測)であり、とくに鞘口や把に銀装具が取り付けられた銀装大刀や全長が100cmを超える長大な鉄剣が特徴である。鉄剣1、2(第55図206、207)の把縁は鹿角装であった可能性がある。銀装大刀については本書第V章第1節、第6節で、朝鮮半島製、日本列島製を想定する二つの見方が示された。類例のない構造であることや近年の古墳時代金工製品研究の現状においては、そのいずれかに決することは現段階では難しいと考えた。したがって本書では2つの結論を併記した。これに加えるなら、朝鮮半島製の大刀を日本列島内で再加工するという事も想定される。鉾は鉾身4点、石突1点がある。これは、本書第V章第1節にあるように、日本列島内でも多数副葬事例に含まれる。鉄鉾2(第56図212)は長大で厚みある刃部で、袋部の断面形が八角形であるとみられることに注目できる。また、鉄鉾1、3(第56図213、214)には鞘とみられる木質が残存する。鉄鏃は最小個体数で126点と多数の鉄鏃が副葬されていた。形式的には長頸柳葉鏃、短頸柳葉鏃、短頸片刃鏃に大別でき、長頸柳葉鏃は鏃身関の形態から2つに細分された(a、bと呼称)。そのほか、形式の不明確な1点がある。現状で確認できる各形式の最小個体数は、長頸柳葉鏃aが26本、長頸柳葉鏃bが39本、短頸柳葉鏃が24本、短頸片刃鏃が14本で、長頸柳葉鏃の占める割合がもっとも多い。鏃の組成としては、九州南部に特徴的な圭頭鏃が含まれないことが特徴である。

馬具には、鑣轡、木心鉄板張輪鐙、鉄装鞍、鉸具、環状雲珠、杏葉、馬鐸、三環鈴があり、古相の馬具一式が揃っている点に注目できる。鑣轡は、二連式銜に一条引手が連結されたもので、立間金具はΩ字形であ

る。銜外環には鹿角鑣とみられる有機質が残存する。木心鉄板張輪鑿は柄部が比較的長く、表裏面の鉄板は輪部の中ほどまで張られている。踏込部の幅は広がらず5つの方形踏込鉞が認められる。鉄装鞍は州浜と磯が一体で、磯金具は後輪にのみ存在する。覆輪金具に付着した塗膜状の有機質の存在から、鞍橋には革張りのないし漆塗りがなされていた可能性がある。さらにその他鉄器とした鉤状鉄器が鞍橋に付属する把手金具である可能性を指摘した。杏葉は総鉄製の小型心葉形杏葉であり、3点存在する。縁金具は4鉞で留められている。三環鈴は4分割、有脚式で古相を示す。環上部が鉄線による補修がなされている点が特徴的である。馬鐸は小型三角形で、外面両面に台形区画の中に珠文が配置された文様がある。これらの馬具は、本書第V章第2節の検討で、新羅圈製で古相を示す鑣轡、鞍、杏葉、三環鈴と百濟、大加耶圈製で新相を示す鑿、馬鐸に分離できることが指摘された。時期や製作地を違えたものがセットとなっている点に注目できる。

農工具は、柄付手斧、有肩鉄斧、鉄鑿からなる重厚な一群、袋状鉄斧、鉄鎌からなる小型で薄手の一群からなる。地下式横穴墓の中では際立って豊富な農工具が副葬されていた。柄付手斧は柄部と握部の境界が不明瞭で、柄部と握部が中空である。列島内に例をみない形態でその系譜を考える上で重要である。有肩鉄斧は肩部が突出し袋部の合わせは密着している。鉄鑿は刃部が有肩で茎部をもつ。柄付手斧と有肩鉄斧は経鐸とみられる繊維で包まれていたことや屍床内に副葬されていたことから、これら重厚な一群が重要な器物であったことがうかがえる。袋状鉄斧は薄い鉄板で作られており刃部が造りだされていない。鉄鎌は細身の曲刃鎌3点で、うち2点は折返し乙技法〔都出1967：p.45〕と確認できる。

その他鉄器には、鑿子、鉤状鉄器、鏝、不明鉄製品がある。鑿子は2個体でそれぞれに平織繊維や紐状の有機質が付着し、副葬時には鑿子本体にこれらの有機質が巻き付けられていたものとみられる。鉤状鉄器は上述の通り鞍を構成する部材の可能性がある。鏝は10片あり、渡り部の長い大型の鏝であったと考えられる。不明鉄製品には板状、棒状などの形態があり、一部は特定の器種に帰属する可能性がある。

青銅鏡には、四獣形鏡、盤龍鏡がある。いずれも古墳時代倭鏡で、面径はそれぞれ11.3cm、12.1cmである。本書第V章第4節の検討で直径10～15cmで面径を同じくする小型鏡が組み合わされた副葬パターンに属することが明らかにされ、類似例として珠金塚古墳北槨が挙げられた。また、周辺地域内では相対的に優位な鏡の保有形態であることも併せて指摘された。

垂飾付耳飾は、2点一対ある。本書第V章第6節で、製作技術についての検討がなされた。長鎖式で心葉形の垂下飾をもつもので、耳環部と垂下部は水滴形兵庫鎖と空玉の中間飾で連結されている。列島出土の垂飾付耳飾では最古相に位置付けられる資料である。また、仔細に観察すると、2点には細かな相違点が認められ、その製作の具体相を検討する上で注目できる。垂飾付耳飾に関しても、大加耶地域との関連がとくに指摘されてきたものの、日本列島製とする意見もある。これについても銀装大刀と同様に本書で明確な結論を出すには至らなかった。

玉類には、勾玉、管玉、ガラス玉がある。勾玉には翡翠製勾玉7点、紫水晶製勾玉2点、管玉には緑色凝灰岩製25点、瑪瑙製2点、ガラス製1点、ガラス玉は小型のガラス小玉557点、大型のガラス丸玉51点がある。翡翠製勾玉のまとまった出土や山陰系の紫水晶製勾玉や舶載品とみられる瑪瑙製管玉など類例の少ないものが含まれている。これらについては、本書第IV章第3節と第V章第5節で分析、検討がなされた。その結果、下北方5号地下式横穴墓出土玉類の特徴として、主要な玉類が製作時期からのセット関係を維持し、かつ、まとまった点数出土していること、中期後半という時期的な様相をよく示していること、7点も出土した翡翠製勾玉のいずれもが古墳時代前期以前に遡る伝世品であることが示された。そして、その背景には下北方5号地下式の被葬者が玉類の入手や継承で優位な立場にあったことが指摘された。

半円形ガラス製品も上記玉類と同様な脈絡の中でもたらされたものと指摘された（本書第V章第5節）。複数のガラス片を融着させて製作されており、現状で類例のない用途不明品である。平坦面があることから平坦な器物に載せて使用された装飾部材であると指摘された（本書第V章第5節）。

出土遺物の時期 これまでの報告と検討を踏まえつつ、下北方5号地下式横穴墓出土遺物の時期的な位置付けは以下のとおりである。甲冑は、鋌留技法導入期よりやや下の時期の所産である。鋌留甲冑としては古相を示す特徴をもち、いずれも橋本達也による中期甲冑Ⅳ段階に位置付けられる（本書第V章第1節）。刀剣類は落とし込み式B類とみられる鉄刀の存在から古墳時代中期以降に位置付けられるが、鉄剣が多数を占める組成であることは古墳時代中期でも古相を示す特徴であるとされる〔鈴木2012：p.213〕。鉄鏃は、長頸鏃が主体となる組成で、形態の特徴から長頸鏃定型化以前の段階に位置付けられる（本書第Ⅳ章第2節、第Ⅴ章第1節）。鉄鉾は高田貫太によるⅡ期、富山直人による鉾2ai期ないし鉾2aii期に位置付けられる〔高田1998：pp.51 - 54、富山2017：pp.44 - 47〕。馬具は、新古の2相があり、古相の鑣轡、鉄装鞍、杏葉、三環鈴は5世紀第1四半期後半から第2四半期はじめに、新相の鐙と馬鐸は5世紀第2四半期後半から中葉に位置付けられた（本書第Ⅴ章第2節）。農工具は、有肩鉄斧が野島によるⅢ式〔野島1995：pp.54 - 56〕、鉄鑿が古瀬によるⅠA類〔古瀬1998：pp.82 - 84〕にあたる。曲刃鎌は魚津曲刃鎌B1類〔魚津2003：p.34〕にあるとみられる。以上からこれらの農工具は古墳時代中期中葉に中心を置く組み合わせといえるだろう。袋状鉄斧はその位置付けが難しいが、当該時期においても矛盾はない。

そのほか、青銅鏡は、盤龍鏡が古墳時代前期後葉から中期前葉、四獣形鏡が古墳時代前期末から中期にかけての生産であることが示された（本書第Ⅴ章第4節）。垂飾付耳飾は列島最初期の資料であり、古墳時代中期中葉におさまるものとみられる〔金2017：p.143〕。玉類のうち翡翠製勾玉は古墳時代以前、紫水晶製勾玉は古墳時代中期、緑色凝灰岩製管玉は古墳時代前期末から中期前半、ガラス玉は基本的に中期後半段階に出現するもので占められるとされた（本書第Ⅴ章第5節）。半円形ガラス製品もガラス玉と同様である。

以上から、下北方5号地下式横穴墓出土品は、わずかな時期差を有するものが含まれつつも、総体として古墳時代中期中葉にその中心をもつ資料群であるといえる。その中に製作年代のさかのぼる翡翠製勾玉や2面の青銅鏡などが含まれているものといえる。したがって、副葬年代は、古墳時代中期中葉、須恵器でいえばTK216型式段階に位置付けることがもっとも妥当であると考えられる。ガラス玉や横矧板鋌留短甲の様相を踏まえればTK216型式段階の中ではやや新しい様相を有するといえるだろう。

これら多種多量の器物が、いかにして下北方5号地下式横穴墓の被葬者のもとに集積されたかについては、様々な可能性が考慮される必要がある。ただし、製作年代のさかのぼる鏡や玉類の一部についても本書第Ⅴ章の検討より地域内での伝世は認めがたいと考えられることや、近しい時期の列島各地に同様の副葬品組成をもつ古墳が多く存在している状況をみれば、下北方5号地下式横穴墓から出土した遺物群は、各地域で個別に数時期にわたって様々な遺物が集積されていった結果とみるより、何らかの社会的背景に基づいた器物の組み合わせとして一時期に一括してもたらされたこととみることが合理的のように思われる。

下北方5号地下式横穴墓の構築年代 上記の通り、下北方5号地下式横穴墓出土品は、一回の埋葬にともなって副葬された一括の遺物群であると考えられる。したがって、これらの遺物群の示す時期、すなわち古墳時代中期中葉、須恵器でいえばTK216型式段階が下北方5号地下式横穴墓の構築年代であるといえる。前方後円墳集成編年では7期の中ごろに該当する。

下北方5号地下式横穴墓の墳丘である下北方9号墳の周溝外縁斜面から出土した、古墳築造時期を示す可能性のある4点の高坏（第10、11図）の時期もこれに矛盾しない。

第3節 古墳時代中期における九州南部古墳築造動向と下北方5号地下式横穴墓

九州南部首長連合の存在 現在の宮崎県域海岸部から大隅半島にかけての九州南東部は、前方後円墳が高密度に築造される地域で、九州でも大型の古墳が集中する地域である。柳澤一男は一連の研究において、この地域の古墳時代前期中葉から中期後葉にかけて広域の首長層連合体の存在を指摘し、それを「南九州首長連合」と呼んだ〔柳澤 1995、2000、2019〕。さらに、この連合の盟主的な位置付けをもつ地域内の大型前方後円墳の築造地が時期ごとに日向と大隅を移動することを示し、この動向が列島全体におよぶ首長墓系譜変動と対応するものであると想定した〔柳澤前掲同〕。白石太一郎は南九州の大型古墳について地域的な首長連合の形成を認め、有力首長たちが交代で盟主につくような政治体制の存在を想定した〔白石 2014〕。

九州南部における下北方5号地下式横穴墓の位相 以下では、こうした先行研究を踏まえながら、下北方5号地下式横穴墓が築造された古墳時代中期中葉の九州南部の様相を確認し、その中での下北方5号地下式横穴墓の位相を検討したい。

下北方5号地下式横穴墓が構築された古墳時代中期中葉において、九州南部で最大規模の古墳は志布志湾岸地域にある横瀬古墳である。墳長約140mで二重周溝を備えた前方後円墳で、同時期では九州でも最大規模の古墳である。付近では、神領10号墳（前方後円墳、54m）、役所塚古墳（前方後円墳、57m）や岡崎18号墳（円墳、約19m）などが同時期の築造とみられる。横瀬古墳を頂点とする地域のまとまりが形成されていたとみられる。九州南部のそのほかの地域では、前方後円墳の築造が低調で、志布志湾岸地域以外で地域的にまとまった古墳の築造動向が認められるのは、下北方古墳群、本庄古墳群がある大淀川下流域である。この時期、下北方古墳群では、下北方3号墳（前方後円墳、68m以上）、下北方11号墳（前方後円墳、60～70m）が築造されており、下北方5号地下式横穴墓（＝下北方9号墳：円墳、約25m）と並行関係にあるとみられる。本庄古墳群では、本庄37号墳（前方後円墳、73m以上）、あるいは本庄42号墳（前方後円墳、90m）、本庄29号墳（前方後円墳、63m）などが同時期の前方後円墳として挙げられる¹⁾。

したがって、下北方5号地下式横穴墓が構築された古墳時代中期中葉では、九州南部の広域な地域的まとまりの中で盟主的な位置を占めていたのは横瀬古墳のある志布志湾岸地域の勢力であり、下北方古墳群を含む大淀川下流域の勢力はそれに連なる有力勢力であったと位置付けられる²⁾。さらに、下北方5号地下式横穴墓（＝下北方9号墳：円墳、約25m）は下北方古墳群中で並行関係にある2基の前方後円墳よりも墳丘の面からみれば下位に位置付けられる。つまり、九州南部社会あるいは大淀川下流域という地域社会での位相としては、最上位層ではなく、それに連なる有力勢力の一角にあるとすることができる。また、津曲大祐がすでに示しているよう〔津曲 2010：pp.125 - 147〕に、奥行き5.5mという玄室規模も、宮崎平野部の前方後円墳に採用された長軸約7mという埋葬施設の規模に次ぐもので、この点からも下北方5号地下式横穴墓が地域内の最上位層ではないことが分かる。ただし、墳丘を有する数少ない地下式横穴墓であることや、地下式横穴墓の中では最大規模である点は、地域内でも上位階層の一角に位置していたことは間違いない。

第4節 下北方5号地下式横穴墓の評価

これまでの評価と問題点 下北方5号地下式横穴墓については、副葬品の質や量、地下式横穴墓としては最大級の規模であることなどから、「宮崎平野部（九州南部）の有力首長であり、ヤマト王権と密接にかかわりながら朝鮮半島での対外交渉に関わった人物の墓である」との位置付けがなされてきた。本書において

下北方5号地下式横穴墓出土遺物や遺構の全体像が示され、検討がなされことで、これまでより具体的な下北方5号地下式横穴墓の位置付けや評価をおこなうことができるようになったと考えられる。また、これまでその規模や副葬品内容から地域で最上位層の古墳墓としての印象をもって語られることが多かったが、この点についても再考の余地がある。

下北方5号地下式横穴墓の評価 本書では、付属具を有するセットを含んだ甲冑の保有や武器を多量に保有すること（本書第V章第1節）、2面の鏡や翡翠製勾玉がヤマト王権中枢からの直接分与、配布により入手されたと考えられること（本書第V章第4、5節）が示されたほか、舶載品とされ2つの系譜をもつ馬具（第V章第2節）や最新技術を用いて製作された銀装大刀や垂飾付耳飾（第V章第6節）、特殊な柄付手斧を含む豊富な農工具の保有などから、下北方5号地下式横穴墓の被葬者が、ヤマト王権を中心とした当該時期の朝鮮半島情勢に関わる対外活動に参画した人物であることが改めて確認されたといえる。

さらに、本書を通じて、下北方5号地下式横穴墓の古墳時代中期中葉におけるより具体的な位相が明らかになってきた。下北方5号地下式横穴墓でみられたような小札肩甲、垂飾付耳飾、銀装大刀などの当該時期では特殊な器物の保有が、同時期の列島各地に存在する古墳と共通する要素であることは改めて強調されるべき点であろう。下北方5号地下式横穴墓の被葬者は、こうした特殊な器物を保有する古墳の被葬者ととともに、朝鮮半島情勢に関わる対外活動を担い活躍した人物であり、その中で各種器物を入手する機会を得たものと考えられる。また、これらの古墳にはヤマト王権による製作、配布が想定される鏡や帯金式甲冑をもち、墳丘規模もほぼ同じくするものが多い点からは、これらの古墳の被葬者が参画した対外活動を担う組織がヤマト王権のもと秩序だった集団として編制されていたことをうかがわせる。この点は銀装大刀にみられる環頭の切り落としや朝鮮半島で日本列島出土資料を確実にさかのぼる長鎖式垂飾付耳飾が現状で見いだせないことの意味を考える上でも示唆的である。加えて、これらの古墳には朝鮮半島系の埋葬施設が採用されているものが少なくないが、下北方5号地下式横穴墓で地下式横穴墓としては例外的に鏝使用木棺が用いられていることも同根の背景をもつといえる。鏝や紫水晶製勾玉などの分布からは、下北方5号地下式横穴墓の被葬者と瀬戸内地域の勢力との深い関係も想定される。

一方で、今回、墳丘を含む下北方5号地下式横穴墓の構造が明らかになり、それを同時期の九州南部の古墳築造動向と比較することで、下北方5号地下式横穴墓が当該地域内では有力者層ではあるものの、最上位層ではないことが明らかとなった。にもかかわらず、多くの副葬品が出土した下北方5号地下式横穴墓の評価をより明らかにするためには、その意味を考える必要があるだろう。

こうしたことを考える上で、林正憲の指摘は重要である。林は「墳丘規模と副葬品の階層構造が明確に対応しない事例」の存在をあげ、それを古墳時代の階層構造が「地域における社会的な位置付けを示す墳丘規模による階層構造と、被葬者個人の職能的な位置付けを示す副葬品による階層構造」に区分されていることよるとした〔林 2010〕。また本書第V章第4節においては地域社会の維持・再生産に必要とされた鏡と対外交渉への参与に必要とされた装身具という志向性の差が指摘されている。

つまり、下北方5号地下式横穴墓には、地域内（ヤマト政権内、九州南部内）での序列を表象するものとの対外的な活動における職掌を示すものが包摂されているといえる。前者の代表が墳丘や埋葬施設の構造、鏡であり、後者の代表が垂飾付耳飾や銀装大刀などであろう。銀装大刀と垂飾付耳飾の製作地に関する問題は残されたものの、これらがこの時期にヤマト王権を中心とする対外的な活動での職掌を示す器物として採用あるいは創出されたということは認めてよいだろうし、その点がこれらの遺物を評価する上で重要な意味をもつと考えられる。また、帯金式甲冑とくに眉庇付冑は「古墳時代中期後半の朝鮮半島情勢における軍事的

行動への参画・活動に対する身分表象として配布された」[橋本 2004 : p.215] と評価されている。

以上から、下北方5号地下式横穴墓の被葬者は、地域内では最高位に位置する人物ではないものの、ヤマト政権下で対外的な活動を担う人物として評価を受け活躍し、その結果、職掌を示す各種器物を保有することができたものと考えられる。地域側の視点に立てば、下北方5号地下式横穴墓の被葬者は、先進的な文化、技術、資源を確保するためヤマト王権や朝鮮半島との紐帯を維持するための役割が期待されていた人物であったともいえるのではないだろうか。

第5節 展望と課題

下北方5号地下式横穴墓は昭和50(1975)年に発掘調査がおこなわれ、すでに45年が経過した。その内容から注目をあつめ多くの研究で取り上げられてはいたものの、未報告資料が存在すること、概要報告に誤りがあることなど、その年代的位置付けや評価をおこなう上での問題点を抱えた状況であった。そのような中、本書で遺構、遺物の全体像をようやく提示できたことになる。中でも、出土資料の全容が明らかになったこと、その年代的位置付けが明確になったことの意味は大きいと考える。また、これら資料については第V章において様々な視点から検討が加えられた。その結果、下北方5号地下式横穴墓のより具体的な歴史的な位置付けが明らかとなり、加えて当該時期の対外活動に関わる地域社会や交流の姿の一端が示されたのではないだろうか。こうした検討の積み重ねが、古墳時代中期の社会のありようをより具体的に捉えていくことのきっかけになると思われる。

しかしながら、まだ多くの課題も残っている。半円形ガラス製品のように用途が明確にできなかったもの、鉤状鉄製品などのように詳細な検討がおこなえなかった遺物の存在といった基礎的な部分、また、下北方5号地下式横穴墓の九州南部、とくに内陸部のえびの盆地をはじめとする諸地域、あるいは列島各地とのより具体的な関係、さらには朝鮮半島に所在する倭系古墳との関係をどう捉えるかなどこれからの検討課題は多岐にわたっている。

加えて、下北方5号地下式横穴墓については、その内容についての講座や現地見学などの情報発信をおこなっており、地域での関心も高まっている。今後、本書の成果をどのような形で還元し、現代の地域社会へ資することができるのか、考え、実行していくことも求められるだろう。そのためには、これら遺物や調査記録を適切に保存し後世へつなぎつつ継続的に検討をおこなっていかなければならない。

註

- 1 下北方3号墳と11号墳の先後関係については、資料の制約などから現時点で明らかにできない。また、下北方5号地下式横穴墓と下北方3、11号墳の時期についても、一方は副葬品から、一方は埴輪からの時期比定であり、両者の厳密な意味での時期の比較は難しいことも承知している。また、本庄古墳群は前期段階から後期にかけて継続的に前方後円墳が築造されたとみられる古墳群である。中期にも一貫して前方後円墳が築造されているものとみられるが、埴輪などの詳細な検討が不十分であり、今後そうした検討を重ね、古墳群自体の築造動向の検証や周辺古墳群との相互の関係性を追求する必要がある。
- 2 ただし、九州南部の古墳の規模に認められる地域間の差は、あくまで相対的なもので、九州南部が完全に序列化され、個別の自律的な動きが存在しなかったとは考えていない。

参考文献

- 魚津知克 2003「曲刃鎌とU字形鉄鋤先－「農具の画期」の再検討－」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集
帝京大学山梨文化財研究所 pp.29 - 48
- 金宇大 2017『金工品から読む古代朝鮮と倭－新しい地域関係史へ』京都大学学術出版会
- 白石太一郎 2014「古墳からみた4・5世紀の南九州とヤマト王権」『生目古墳群の実像～15年目の再検討～』宮崎市教育委員会 pp.17 - 24
- 鈴木一有 2010「第3節 武器類の評価」『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第173集 国立歴史民俗博物館 pp.212 - 221
- 高田貫太 1998「古墳副葬鉄銚の性格」『考古学研究』第45巻第1号 考古学研究会 pp.49 - 69
- 都出比呂志 1967「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』第13巻第3号 考古学研究会 pp.36 - 51
- 津曲大祐 2010「古墳埋葬施設における竪穴系と横穴系の関係性－妻入り型地下式横穴墓の事例から－」『還暦、還暦？、還暦！』－武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集－ pp.125 - 147
- 富山直人 2017「近畿地方出土鉄銚の基礎的研究」『考古学研究』第64巻第1号 考古学研究会 pp.40 - 58
- 野島永 1995「古墳時代の有肩鉄斧をめぐって」『考古学研究』第41巻第4号 考古学研究会 pp.53 - 77
- 橋本達也 2004「眉庇付冑の分布とその背景－古墳時代中期後半の政権と地域－」『西南四国－九州間の交流に関する考古学的研究』愛媛大学法文学部 pp.211 - 222
- 橋本達也 2012「①九州南部」『古墳時代の考古学2 古墳出現と展開の地域相』同成社 pp.107 - 117
- 橋本達也編 2016『大隅大崎 神領10号墳の研究 I』鹿児島大学総合研究博物館研究報告No.8 鹿児島大学総合研究博物館
- 林正憲 2010「古墳時代における階層構造」『考古学研究』57 - 3 考古学研究会 pp.22 - 36
- 古瀬清秀 1998「4 農工具」『古墳時代の研究 第8巻 古墳Ⅱ副葬品』雄山閣 pp.71 - 91
- 柳澤一男 1995「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第9号 宮崎県 pp.21 - 56
- 柳澤一男 2000「古墳時代日向の王と生目古墳群」『浮かび上がる宮崎平野の巨大古墳』宮崎市教育委員会 pp.21 - 42
- 柳澤一男 2019「古墳時代日向と宮崎市周辺の古墳」『生目古墳群とみやざきの古墳群』宮崎市教育委員会 pp.86 - 92
- 和田晴吾 1998「古墳時代は国家段階か」『古代史の論点4 権力と国家と戦争』小学館 pp.141 - 166



下北方9号墳と
大宮地域まちづくり推進委員会設置の看板